行方も知らぬわが思ひ

土田龍太郎

鎭守府將軍藤原秀郷の九代の末孫、左兵衞尉佐藤憲清と聞えしは、弓馬の家に生れながら詩歌管弦の道にも暗からで、鳥羽院の北面に仕へゐたりしかども、保延三年齡二十二のころとかや、親しき友のにはかにみまかりしにおどろきてやがて家を出で世を遁れて後、西行と名乘りて國々を經廻りつつ、生れつきたる才（ざえ）のかしこきにまかせ大和歌をりにつけて詠み出るにしたがひて、つひに敷島の道にいみじき名を得たること知らぬ人とてはあるまじきなり。

あるいは山林斗藪（とそう）に行ひすましまたは花にめで歌に思ひをはらし、旅にさすらへ旅に死にしこの法師の行蹟くさぐさの文に記されたれど、そが中にはうつつにありしとはえしも思はれぬことどもさへうちまじりたれば、これらさながらまことなるにてはあるまじけれども、西行一期の風懷の跡をしたひたづねむともがら、西行物語に撰集抄のたぐひせめて一わたり披き見ではあるべからず。

西行世にならびなき歌人なりしことさらにもいはず、今に遺れる詠草いとあまたあり、ただ數へもてゆけば二千首を下るまじとぞおぼゆる。秀歌こころありて、今の人の口ずさみのたねとなるもの少からず。文治に成りし千載集には圓位法師の歌とて十九首入集し、さらに建久に奏覽ありし新古今集の收むる西行の歌、九十四首の多きに及べり。

後鳥羽院の遺したまひし御口傳の中にて、ほぼ同じ世にありて歌人の名に立てりし釋阿西行俊惠定家家隆雅經秀能などにつきて、この院の論（あげつら）ひたまへることさまざまなれど、西行のことは左のごとくにのたまひたり。

> 西行はおもしろくてしかも殊にふかくあはれなる、ありがたく出來がたきかたもともに相兼てみゆ。生得の歌人とおぼゆ。これによりて、おぼろけの人のまねびなどすべき歌にあらず。不可說の上手なり。

世のおしなべたる歌讀みの及びがたきさかひに至りぬる西行のこと、生得の歌人と見定めたまひぬる院の一言、いとも重しといはでやはあらむ。

西行を同じ世に名を得たる歌人と比べ見るに、その歌柄のことなることたが目にもいともきはだちて見ゆるは、これこの法師の先規故實に拘ることまれにて、おのが心の思ふにまかせてほしきままに一首を唱へ出すを習ひとせしがゆゑなるべし。さるはこの法師の詠歌、ことさらによそほひつくろへるあとしるからねば、さまで宮びたらず。胸の思ひのおのづから口より出づるがに聞ゆるもの少からねば、おもてばかりはなにとはなしに今めき

ておぼゆるものさへうちまじりたり。されば、今の世の生さかしら人に西行の歌をわきて好めるもの少からず。さはれ西行をことさらにもてはやすめるかかるさかしら人、まことに西行詠歌の骨髄を見究めたりしやいなや、いとも疑はしといはでやはあらむ。

西行の歌がら、その生れつきたる心がらに根ざせるにほかなければ、凡下のやがてえ習ふものにてはあらず。院もかかるおもむきにてぞ西行の歌をおぼろげの人のまねびなどすべき歌にあらずといましめたまひしなるらむ。

かの鈴屋大人みづからことに好めりし新古今集より六百九十四首がほど選りて、歌ごとに註解もしは論評を施して、美濃の國の故里に還らむとせし門人大矢重門に書き贈りたり。これすなはち世に聞ゆる新古今集美濃の家づとにほかならねど、大人の釋きざままめやかにてなほざりならねば、かの集に載れる歌の意を知らむにいとよきたよりとなりて、近き世の歌學びするともがらのめで用ふることひとかたならぬは、げにさもありぬべきこととやいはまほしき。

この家づとに大人の採れる西行の歌の數少からず、ほぼ四十首にも及べり。これらの歌の大人の說きやう言短かなるあり長きあり、詳略さまざまにて、かの秀歌とて弘く知られぬる

心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ澤の秋の夕暮

につきては、ただめでたしと一言云へるのみにて、また

芳野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬかたの花をたづねむ

には、よくととのへりとばかり記してやみたり。ほかに

ふりつみし高根のみ雪とけにけり清瀧川の水のしらなみ

につきては、はじめに、めでたし、詞めでたしと云ひて後、一首の内の詞、けりとしらなみのことといささか論へり。これにはかはりて、譽めも謗りもせで、ただ一首の語義語格ばかり解きてやみぬる例ここかしこに見ゆ。

さらに、西行の詠みざまいともほしきままにて、則に適はぬところあれば、かかるところを咎めつつ、一首をさながら云ひ落すことはたなきにあらず。今はただ

小ぐら山ふもとの里に木の葉ちれば梢にはるる月を見るかな

の一首のみ引きみるべし。この歌をけみして鈴屋翁の曰へらく、

三の句もじあまりいと聞くるし。例のこの法師のわろきくせなり。この歌は、小倉山、木の葉ちれば、梢にはるる月を、ふもとの里に見るかなといふ意なり。かやうに心得ざれば、見るかなといふことよりどころなし。その故は、本のつづきのままにしては、ただ見るといへるのみ、こなたのうへにて、その外はみな、かなたのうへのみ

にて、こなたにつきたる詞なきゆゑに、ととのひわろきなり。近き世の歌にはさることいと多し。人の心づかぬことなり。

かく云ひて、この一首の心とみにはとほりがたきを咎めたれども、この歌さまで解きがたしとも思はれず。鈴屋大人より見るに、圓位法師、いみじき上手の歌讀みのには列（つら）には入ぬべけれども、この法師、大人のわきて好めりし歌人にてはあらざりけむこと、美濃の家づとを一わたりけみするとき、あらあら思ひ知るにたへたり。

山家集もしは西行法師のものせる自歌合のたぐひを繙（ひもと）かむに、おもしろき歌あはれに心深き歌ここかしこにありてわが目にとまれども、いづれよしありて、これぞ至極と見定めがたきはさることなれども、秀歌とてことにわがあげまほしきは、富士の煙を詠める右の一首にぞありける。

風になびく富士の煙の空に消えて行方も知らぬわが思ひかな

この歌、西行法師集と稱（い）へる異本山家集に載りたれども、

あづまのかたへ修行し侍りけるにふじの山をよめる

といふ詞書のそひて新古今集雜歌中にも入りたり。

鈴屋大人、美濃の家づとにてこの歌につきて記せること左のごとくなれども、大人のこの歌をさまでよしとも思はざりけむこと、ここの釋きざまよりえ推し測るべし。

初句三の句、例のもじあまり聞きぐるし。下句、思ひのゆくへも知らぬにはあらず。上なる歌の、いかになりゆくわが身なるらむと同意にて、身のゆくへもしらぬことを思ふ思ひなり。されど戀の歌と聞えていかが。

初と中の五文字の字あまりの則（のり）に合はぬは、大人の説けるごとくなれども、これを聞きぐるしと云ひてせちに咎むべきにしもあらじ。上なる歌と云へるは、伊勢にまかりけるときに西行の詠めりし

すずか山うき世をよそにふりすてていかになりゆくわが身なるらむ

てふ一首を指せれども、この歌の意（こころ）と風になびくの歌にこめし思ひと同じからねば、兩首をただ並べ比べむは危ふかるべし。

新古今集の雜歌中に入れるこの一首、西行法師家集にては、戀の歌十首列ねたる中に見えて、宣長翁、美濃の家づとの右に引けるところのすゑに、戀の歌と聞えていかがと記せれど、これ戀の歌とはさらにえ見ゆまじきなり。

わが思ひながらわがものともおぼえず、富士の煙とともにただあくがれてやまぬその行方、われにも知られざるぞかしといふが一首の意（こころ）なるべし。この一首まことに心深きことこよなし。富士の頂より出づる煙、風吹くままに雲居はるかになびくそのはては、空に消

えていつしかあとかたもなくなりぬれど、はるかにそをながめやるわが心さへ、おのづから煙にいざなはれゆくがに、空のかなたにあくがれて行方も知らずなりぬれば、ものぐるほしきけさへそひてあやしきことただならず。西行をつひのよるべも見えぬ終りなき旅にすずろに驅りてやまざりしかかるあやしき思ひ、はかなくかたちなくとこしへなるかなたにただに向へりしにまぎれなければ、もののけのごとしといはばこそさすがにはばかりなきにあらざらめ、なほもののけにもにて、はらはむとすれどもえはらふまじければ、つひにわが身を離れざりしなるべし。

富士の煙を詠めりしこの一首、法師の生き死にのつひのはてなることよなく深く玄（はる）かに幽（かそけ）きさかひをさながらただ三十三文字にて捉へたるににたれば、一期のあはれただここに極まれりとこそ云ふべからめ。

今に遺れる西行詠草二千首にあまれども、そが中にまた上もなくめでたしとおぼゆるはまさにこの風になびくの一首にほかなきなり。

かくもめでたき歌ながら、鈴屋翁のさまでたふとぶことなくてやみぬるはそもいかなるゆゑにやあらむ、いともいぶかしと思はでやはあるべき。

（令和四年八月三十一日受附）